

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 3 日現在

機関番号：33303

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23660048

研究課題名(和文) 外来化学療法を受けて生活するがん患者のサバイバーシップを支援する看護モデルの開発

研究課題名(英文) Development of a nursing model for supporting survivorship of cancer survivors undergoing chemotherapy

研究代表者

田村 幸子 (TAMURA, Sachiko)

金沢医科大学・看護学部・教授

研究者番号：50454228

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円、(間接経費) 510,000円

研究成果の概要(和文)：平成23年は全国がん診療連携拠点病院で外来化学療法を受けるがん患者を対象に、実態調査を行った。回収できた826名のデータから、身体側面では痛みやその他症状の実態、精神・心理側面では不安・うつの実態、社会側面では就業・同居家族の実態が、それぞれ明らかになった。またQOLの実態も明らかにした。平成24年は回収データの統計分析を行い、QOLと各問題との関連に基づいてケアの方向性を考察した。平成25年は具体的なケア方法を探求し、身体症状への看護介入として「症状マネジメントの統合的アプローチ」、不安・うつへの予防的看護介入として「がん体験の語り」が有用であると考察した。今後の課題は有用性の検証である。

研究成果の概要(英文)：In 2011, a fact-finding survey was carried out targeting cancer patients undergoing outpatient chemotherapy at cancer medicine cooperation base hospitals around the country. Data collected from 826 persons was used to determine the status of pain and other symptoms in terms of physical aspects, the status of worry and depression in terms of mental aspects, and the status of employment and cohabiting family members in terms of social aspects. The quality of life was also determined. In 2012, the collected data was analyzed and the direction of care was considered, based on the relationships between the quality of life and the various issues. In 2013, specific care methods were sought, and The Integrated Approach to Symptom Management for nursing intervention in physical symptoms and Narrative Approach about cancer experiences for preventive nursing intervention for worry and depression were considered to be effective. The next issue is to verify their effectiveness.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：がん看護 実態調査 がんサバイバー 慢性期 壮年期 看護モデル

1. 研究開始当初の背景

(1) がん医療のめざましい進歩によりがん患者の生存率は年々上昇しており、今や長期がん生存者の増加に伴い多くのがんは慢性疾患に位置づけられている。しかしそれは一方で、“がんを抱えながらどう生きていくか”の新たな課題との直面でもある。

(2) がんサバイバーシップに関連する国外の研究については、「欧米では20世紀の新しい流れであるポジティブ心理学の影響を受け、がんを体験してもなお意味を見出し、サバイバーが積極的に生きる視点で、コーピング研究から意味研究へとすでに進展している」と紹介されている。またその意味研究においては、「がんによって生じる身体症状や機能障害への対応は、がん患者が体験の意味を見出す上で重要」であり、また「がん患者の意味には疲労や身体状況が影響する」とされている。

(3) 一方国内では、特定の部位や入院患者のがん看護の研究については多く見受けられる。がん患者のQOLに関する研究では、轡田らが乳がん体験者のサポートグループ参加とQOLとの関連を述べており、高橋らががん体験者に対する自助グループによる自尊感情・受容サポートとQOLとの関連を述べている。また、皆川らは、肺がん体験者のQOLに影響する生活上の障害として痛みや身体症状を指摘している。がん患者の心理的適応に焦点を当てた研究では、荒井が、壮年期にがんの体験をもつ高齢者ががんの体験を受けとめる3段階を紹介し、藤田ががん体験者がストレスと折り合いをつける力の特徴を述べている。しかし、がんサバイバーシップの概念である“がんを抱えながらその人らしくどう生きていくか”に焦点をあてた研究はまだほとんど見受けられない。

2. 研究の目的

外来化学療法を受けて生活するがん患者の生活上の問題を明らかにし、実態に基づいてサバイバーシップを支援する看護モデルを開発することである。

3. 研究の方法

(1) 平成23年度

全国がん診療連携拠点病院で外来化学療法を受ける壮年期がん患者を対象に質問紙実態調査を行った。がんサバイバーの抱える問題を「身体的側面」「精神・心理的側面」「社会的側面」の3側面で構成し、各側面の問題はがんサバイバーの全ての時期にみられる問題として既に指摘される問題を取り上げ、慢性期における実態調査とした。身体側面では「痛み」「その他身体症状」および、これらが影響する「生活基本動作」の自立状況を、自作自記質問紙を用い選択回答で問うた。精神・心理的側面では苦痛および不安や恐怖に

よって引き起こされやすい「不安」や「抑うつ」の実態を、調査票 HADS(Hospital Anxiety and Depression Scale)を用いて調べた。社会的側面では経済的問題との関連から就業状況を、社会的孤立との関連から同居家族の状況を、自作自記質問紙を用い選択回答で問うた。またこれらの問題の影響を受けているQOL(生活の質)を、調査票 QOL-ACD(Quality of Life Questionnaire for Cancer Patients Treated with Anticancer Drugs)を用いて調べた。

(2) 平成24年度

回収データの統計分析を行い、QOLと各問題との関連に基づいてケアの方向性を考察した。

(3) 平成25年度

具体的なケア方法を演繹的に探求した。

4. 研究成果

(1) 実態調査

対象者の背景

全国388施設に配布し、835名(回収率21.5%)から回答が得られ、選定条件に合った826名分を分析対象とした。性別は、男42.7%、女56.5%であった。年代は、30歳代66名(8.0%)、40歳代174名(21.1%)、50歳代392名(47.5%)、60歳代181名(21.9%)であった。

身体的側面

痛みは「ある」と「時々ある」の合計で、皮膚・筋肉痛35.6%、骨・関節痛28.7%、胃・腸などの内臓痛26.4%、頭痛25.9%、神経痛10.9%、血管痛8.7%に存在した。身体症状についても「ある」と「時々ある」の合計で、体力低下66.3%、全身倦怠感64.7%、便秘46.1%、食欲低下42.7%、末梢神経麻痺43.2%、吐気・嘔吐33.5%、浮腫・腹水13.7%、呼吸困難感11.7%に存在した。生活基本動作は、活動・移動、清潔・整容、食事、睡眠、着替え、排泄、会話において95.0~99.0%が自立し、買い物と掃除・洗濯においては86.9~89.0%が自立していた。介助別からみると、全面介助は掃除・洗濯3.2%、買い物2.8%であり、一部介助は買い物8.2%、掃除・洗濯4.1%、活動・移動3.8%、清潔・整容1.6%、食事1.0%であった。

精神・心理的側面

不安20.2%、抑うつ13.2%に存在した。

社会的側面

就業では、常勤41.3%、パート11.3%、無職45.2%であった。同居家族では、配偶者22.5%、子5.8%、親8.2%、その他2.1%、独居6.8%、および複数記入54.6%であった。

(2) QOL

QOL総得点

最小38~最大106、平均得点±標準偏差値(および得点率)は80.95±13.070(73.6%)

であった。カテゴリ毎の平均得点と標準偏差値（および得点率）は活動性 25.50±4.749（85.0%）、身体状況 21.04±3.965（84.2%）、精神・心理状態 18.92±4.209（75.7%）、社会性 13.22±4.799（52.9%）であった。

痛みとQOLとの関連

皮膚・筋肉痛、骨・関節痛、内臓痛、頭痛、神経痛はQOL全カテゴリとの間に有意な関連がみられた。血管痛は社会性カテゴリとの間に有意な関連がみられた。

身体症状とQOLとの関連

体力低下、全身倦怠感、便秘、食欲低下、吐気・嘔吐、呼吸困難感はQOL全カテゴリとの間に有意な関連がみられた。浮腫・腹水は社会性カテゴリを除く全カテゴリとの間で有意な関連がみられ、末梢神経麻痺は活動性カテゴリや精神・心理状態カテゴリおよび社会性カテゴリとの間で有意な関連がみられた。

生活基本動作とQOLとの関連

活動・移動、掃除・洗濯、買い物はQOL全カテゴリとの間に有意な関連がみられた。清潔・整容、睡眠、着替え、排泄は、活動性カテゴリとの間で有意な関連がみられ、食事、会話はQOLのどのカテゴリとも関連がみられなかった。

不安および抑うつとQOLとの関連

不安と抑うつはいずれもQOL全カテゴリとの間に有意な関連がみられた。

就業とQOLとの関連

就業はQOL活動性カテゴリとの間で関連がみられた。

同居家族とQOLとの関連

同居家族はQOL社会性カテゴリとの間で関連がみられた。

(3) 必要なケアの方向性

<問題とQOLの関連性から>

慢性期がんサバイバーの身体面への支援

痛みや身体症状の緩和は重要である。また必要な時に必要な福祉・介護が利用できるよう、福祉・介護資源の紹介・調整の必要性が示唆される。

慢性期がんサバイバーの精神・心理面への支援

現に不安・抑うつである人へのケアの重要性はもとより、不安・抑うつへの予防的関わりの重要性についても示唆される。

慢性期がんサバイバーの社会面への支援

就業を維持・促進する支援の重要性があり、そのためには就業状況調整からの支援やサバイバーの活動性を促す方向からの支援の取り組みが示唆される。また、同居家族との問題や独居および孤立の問題に目を向ける重要性が示唆されるとともに、サバイバーの社会性を促す支援の重要性も示唆される。

<QOLのカテゴリ比較から>

活動性と身体状況は高く、精神・心理状態が中間で、社会性は低い。このことから痛みや身体症状などの身体的問題の存在が恐

怖・不安を増強させて精神・心理状態を低下させており、さらに身体的問題と精神・心理的問題が相乗的に社会性を低下させていることが示唆される。したがって慢性期のがんサバイバーを支援するうえで、まずは痛みや身体症状への対策が重要であると示唆される。

(4) 具体的なケア方法

身体的苦痛のコントロール支援

痛みや身体症状への対策として、「IASM(症状マネジメントのための統合的アプローチ(Larson, Patricia J))」が有用であると考えられる。IASMの概念は、「看護師が患者の症状やマネジメントを理解するために、症状の定義を共有し、機序とあらわれ方に関する知識をもつ。看護師が有効なマネジメント方略を開発するために、患者自身が自らの症状をマネジメントするために必要な知識・技術・サポートを提供していく。」としており、がんサバイバーシップの支援への有用性はまだ検証されていないが、有用と予測できる。

がん体験に意味を見いだす支援:

精神・心理状態への対策として、「ナラティブ・アプローチ」が有用であると考えられる。ナラティブ・アプローチの概念は、「社会構成主義の視点を応用したアプローチで、サバイバーの語る「物語」を通して援助を行う。サバイバーの現実として存在し、サバイバーを支配している「物語」をサバイバーとともに見いだしていく作業から出発し、サバイバーが新たな意味の世界を創り出すことにより、問題状況から決別できる。」としており、がんサバイバーシップの支援への有用性はまだ検証されていないが、有用と予測できる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

田村幸子、新谷恵子、佐々木栄子、元雄良治：外来化学療法を受けている慢性期がんサバイバーが抱えている問題およびQuality of Lifeとの関連、看護実践学会誌、査読有、26巻、2014、73-81

〔学会発表〕(計1件)

田村幸子、新谷恵子：Initial Development of a Care System for Cancer Survivors, Based on an Investigation into Their Actual Lifestyle Conditions, 24th International Nursing Research Congress, Prague, Czech Republic, 22-26 July 2013

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田村 幸子 (TAMURA, Sachiko)

金沢医科大学・看護学部・教授

研究者番号：50454228

(2)研究分担者

新谷 恵子 (SHINTANI, Keiko)

天使大学・看護栄養学部・教授

研究者番号：10324039

H25.1.17 分担者削除

(平成 25 年度より連携研究者)

佐々木 栄子 (SASAKI, Eiko)

和歌山県立医科大学大学院・保健看護学研

究科・特任教授

研究者番号：80320688

H24.4.18 分担者削除

(平成 24 年度より連携研究者)

(3)連携研究者

元雄良治 (MOTOO, Yoshiharu)

金沢医科大学・医学部・教授

研究者番号：80210095